

太宰 治に学ぶ 私小説の書き方

没後50年

講師

長野 隆

・弘前大学教授

ながの・たかし 1951年福岡県生まれ、関西学院大学卒業後、同大学院を修了。93年、弘前大学教授、今秋よりエジプト・カイロ大に客員教授として赴任。



太宰は私小説作家か？
あらためて考えると、怪しく思えてくる。故郷・津軽の太宰研究第一人者に聞いてみた。

——太宰治は私小説作家か？

「我々研究者は否定的な見方をしています。東大教授だった故三好行雄氏が私小説の定義を2つの側面で語っています。①小説の時間と実生活の時間が往復可能である②自分の気分を世界との関わりの中で相対化できず、自己完結している」には当てはまらず、この点では夏目漱石の『道草』も私小説ではないと考えられます。そうした文脈で、太宰作品は自然主義に内包された私小説とは見えるかもしれませんが、太宰のよきとボビュラリティは、

いつの時代でも読者が作品の主人公に自分を同化できるというテーマの普遍性と表現の巧みさにあります。もちろん、登場人物と作者の境遇が酷似している点や、各素材が自身の身辺雑記然としている点は否めません。が、太宰の作品は単なる私小説の範疇に収まりきれぬ類のものではないことだけは確かです。敢えていうなら、彼の作品は『メタ私小説』です」

私小説を越えた私小説

——その『メタ』の部分は？

「入り組んだ逆説的な表現と構成で、読者に真偽の審判を委ねている点ですね。例えば、『津軽』の中で、『津軽というのは殊更な処でもないけれど、捨てたもんじゃない』という表現があります。『クレタ人の嘘つきのパレード』的技法です。主観を見せながら、否定することで、最終的には相対化していく。この他の作品にも、『見くび

ってはいけない』とか『悔ってはいけない』、『馬鹿にしてはいけない』等のキーワードが頻繁に登場します。また、再び『津軽』を例にとると、これは事実を記す風土記であるはずなのに、太宰はフィクションである小説『思ひ出』から何か所も引用しているんですよ。この、虚構を事実化し、事実を虚構化して、人を迷わせ、混乱させる表現が、太宰の最大の魅力であり、文学的水準の高さなのだと思います」

——人称の多様さもそのため？

「そうですね。昔、吉本隆明氏が太宰作品を『6人称の小説』と評しましたが、我々は3×3で9人称ではないかという冗談を交わしたものです（笑）。太宰の表現の起点は、昭和5年にバーの女と鎌倉の海で心中を図り、相手だけを死なせてしまった事件。偽装心中だったのではないかという周囲の疑惑を晴らしたくとも、死人に口なしで、自身が小説を書くことでしか証明する術がなかったわけです。書かざるを得ない状況であり、表現を残さなければならぬ必然性があつた。が、どれほど自己言及しようとも、自らの悲劇は証明できないというジレンマに苛まれた結果の、表現のパトスがこうした人称の多重構造に見られるのではないか

と考えます」

——最も私小説的な作品は？

「私小説らしくて、いちばんベーシックなのは『富嶽百景』でしょう。太宰に作家としての自覚が芽生え、絶頂期を迎えた中期の佳作。『津軽』『惜別』『お伽草紙』と、書くもの全てが次々と認められた以前です。太宰は愛人宅に通い、朝から夕方まで規則正しく執筆していました。机のあった場所が愛人宅なのだから決して真つ当とはいえないかもしれませんが（笑）、葉やアルコールや夜の闇の力で小説を書いていなければなりません。常に自己と向き合い、その存在を確認し、深層心理までとことん突き詰めて、作品に昇華させていたのです。だから、太宰には、悲惨な私生活を描くために、敢えて堕ちていくという必要もなかった。

島尾敏雄の『死の棘』を読んだ三島由紀夫が、その感想を誰かに聞かれたとき、〈それは俗物が聞くことだ〉と一喝し、へ小説を書くとき、作家には魔的なものの力が降りてきているのだ」と語ったという逸話があるが、太宰もそれと同様だったのではないのでしょうか。太宰の作品は初期、中期、後期で作風がかなり変わります。また、巧い作品と面白い作品という視点で捉えようと、必ずしも双方が一致しません。面白い作品は、断然初期のものに多いですね。処女短編集『晩年』に収録された作品は、特に実験的で、バラエティに富んでいます。なかの『ロマネスク』は多分に説話的だけれど、道化の技法を用い、太宰特有のユーモアとサービスピ精神に溢れ、思わず笑ってしまう作品。『道化の華』『猿面冠者』や『玩具』は、

私小説を壊す破天荒な私小説。何しろ、物語的な手法の中で、突然作者が自ら名乗って語り始めてしまうのですから《僕は何か小説を書くんだろう》と。

『道化の華』は、太宰のその後の手法に繋がる重要な作品です。

また、学生時代、小説を書きたいという邪な思いで読んでいた僕が（笑）、

感服したのは『魚服記』の客観的手法。短いけれど、非常に完成度が高い作品です。しかし、刺激的ではあつたけれど、太宰を真似ようとは思えなかつたし、真似られるわけでもないと感じていました。我々が太宰的なものを書いて、決して太宰を越えられません。そこに彼ほどの必然性がない限りはね。

後期（敗戦後）は『パンドラの匣』の主人公に《天皇陛下、万歳》という言葉は、戦前は古かつたけれど、今はいちばん新しい」と語らせているように、作品に道徳や倫理の匂いを持つてくる。それは他の作家達の戦後のデモクラシーへの便乗思想への義憤です。戦中も戦後も移り気な思想に与せず、

精力的に執筆活動を続ける姿勢を貫き、多くの読者を獲得し続けていた太宰の自信でもあつたのだと考えます。世間の印象とは裏腹に、太宰は、実は大変気概のある人物でした」

太宰には常に死を急いでいるイメージがつきまとうが……。

「表現の起点が心中相手の死であり、終点が自らの死だったからでしょう。太宰は『命がけ』で小説を書いていた、

とはいえますね。自らのコンプレックス、それは劣等感と優越

感という表層のものではなく、

より深いせめぎ合いのレベルで。

そうすることでした。自分を信じてもらう術がなかったから。そして、語れば語るほど、信じてはもらえないと気づいていたから。至難の業と知りながら、それでも書かずにはいられないエネルギ―が充ちていたんです。そして、それに素質と才能が拍車をかけて、太宰文学が生まれたといえます。

なぜ、太宰の作品が好きなのかと問われると、大抵の読者は、そうした自己意識の探究の果てに、結局は個性を表に出せないで葛藤する主人公の生き方に共感を覚えるからだ、と答えるのではないのでしょうか」

太宰が影響を受けた作家は？

「太宰はかなりの読書家だったようです。自宅には書物が残っていないからです。

ため、こういうものを読んでいたかは具体的に分かりませんが、芥川龍之介と森鷗外が好きだったという話有名です。鷗外の歴史小説の手法を本にしたつもりもしています。

ところで、芥川はともかく、太宰の鷗外好きの理由が以前の僕には正直よく理解できなかった。鷗外じゃなく、どちらかといえば漱石じゃないのか、

と。でも、年齢を経て、その理由が分かってきました。鷗外の小説に登場する女性はおしなべて、温和で、美人で、地に足のついた強さを持っている。太宰が自らの作品で美化する、母性的な女性像とどこか重なるんです。もつとも太宰のほうがもつと甘つたるく描いてますが。とにかく、女を知っている男

が描いた女という印象なんです。対して、漱石は女を知らない男が描いた、としか思えない女なんです。それに気づいて読み始めたら、鷗外がとても身近になった（笑）」

最期は無言こそ雄弁に

太宰作品の骨頂はアフオリズム？「そうですね。エビグラムといつてもいい。中期に書いたエッセイで《事実小説より奇なり》と結び、また別の作品では《何が私を欺いたのか。いわゆる芸術は私である》と書いている。巧いなと思います。実は、小説とは別に太宰は戦後すぐに『冬の火花』と『春の枯葉』という戯曲を2本書いているんです。が、これが少しも巧くない。思想上は重要な作品なんですけれど……。小説では、あれほど多重的に人称を操つておきながら、自己の視線を外して客観的視点で様々な人間を描くという手法は不得手だったのでしょう。太宰のアフオリズムは、やはり小説でこそ発揮されるのです」

もし太宰がもつと生きていたら？「想像できませんね。あの先一体どんな小説が書けたのか、ということ。死後に公開された『如是我聞』を読んでも、直截的な自己暴露に近いものだった。それでもなお、自らの真偽の審判を読者に委ねるべく、太宰が語るべき言葉は残されていたのだろうか。おそらく語り尽くされて、もはや死という形での『無言』を雄弁の代替にせねばならないところまで到達していたのだと思います。今度こそ、心中で命を完全に絶つて」